

グループ紹介

茨木童謡コーラス



茨木コールハーモニー



私たち茨木童謡コーラスは、NPO法人日本音楽生涯学習振興協会のご指導で、平成20年（2008年）の春にわずか10人の少人数で発足しました。約2年を経過した現在、メンバーは55人に増え、コーラスグループらしくなりました。グループへの入会理由は、健康のため、友達づくりのため、趣味を生かすため、ストレス解消のためなどさまざまで、みんなでワイワイ、ガヤガヤと笑い声と歌声にあふれた時間を過ごしています。

私たちは、指導員の支援のもとで練習を行っています。年齢や歌の上手下手を問うことはありませんが、参加者自身が自主性を高めて、「みんなで協力し、みんなで楽しむ、みんなのグループ」をモットーに頑張っています。

私たちは自己啓発のために、年2回、成果発表などを行うことができる機会を作っています。また、昨年の夏からは、介護施設やデイサービスセンターに出向き、施設の皆さんに歌を楽しんでいただいています。私たちがリードし、入所されている方々が中心となってみんなで歌を歌います。その後、「次回はいつですか？」と聞かれるとうれしくなり、ホッとします。

すばらしいご指導をしてくださる先生のもと、これからも仲良く楽しんで歌っていきたくと思っています。

月2、3回（木曜日）、生涯学習センターきらめきで、午後1時から2時30分まで練習しています。

どうぞお気軽に見学においでください。

リーダー 中塚 英則



私たち茨木コールハーモニーは、22年前、茨木市制40周年を記念して作られた第九合唱団の中の有志が集まってできたグループです。当時の春日丘高等学校の清原先生（現大阪府合唱連盟理事長）を中心に、茨木市では数少ない混声合唱団として誕生しました。

現在、団員数は男女合わせて約30人。30歳から80歳までの方々が参加しています。指揮者には安藤先生をお迎えしています。

結成以来、私たちはさまざまな催しに参加してきました。毎年、6月には「大阪府合唱祭」に、11月には茨木市の「市民音楽会合唱のつどい」に参加し、また、大学のクリスマスコンサートなどにも出演しました。約2年ごとには、オーケストラをバックにした定期演奏会も開いてきました。

今まで歌ってきた主な曲は、ヴィヴァルディのグローリアやシューベルトのミサ曲、モーツァルトのレクイエムなど、また、日本の童謡や唱歌などを混声合唱用に編曲したものなどを歌っています。

今は、来年の秋の定期演奏会を目標に、ラインベルガーのレクイエムや日本の曲など数曲を練習しています。

毎週木曜日、午後7時から9時まで、生涯学習センターきらめきで練習しています。歌の好きな方はどうぞ参加ください。お待ちしております。

連絡先 吉田 632-2500



市民インタビュー

この人に会いたくて

白寿を迎えた俳誌の主宰者

たか い ふみ こ

高井 文子さん

高井さんは、現在99歳。今なお、俳句の会を催し、俳誌を発行されています。

「翠酔庵」と記された高井さんのご自宅の門をくぐり、山を取り入れた大きな美しい庭が見える2階の部屋で、俳句にまつわる楽しい話を伺いました。



俳句に初めて触れたのはいつ頃ですか。

もう、50年ほど前になるでしょうか。安威在住の富士憲郎先生のお勧めで入った安威公民館講座で、この一句を作ったのが始まりです。

点々とすみれ残して庭掃除

富士先生がお亡くなりになられて4、5年後に、大槻元茨木市長から「俳誌を作らないか」とのお誘いを受け、安威地区から10人ほどが参加しました。そして、俳誌『風雪』が創刊され、その一翼を担いました。

平成7年（1995年）8月に『風雪』は廃刊になりましたが、その後を受け継いで、同年10月に月刊誌『山びこ』を創刊し、新たな一歩を踏み出しました。今年、『山びこ』は創刊15周年を迎え、1月に記念合同句集を出版しました。

俳句の会は、『風雪』が創刊される頃から私の自宅で催しています。現在は、月に4、5回催し、合わせて90人近い会員と共に俳句作りを楽しんでいます。また、俳画や書道の会も開いています。俳画は紙谷・暁星両先生に入門し、書道は60歳になって佐々木鐵仙先生から指導を受けました。昨年、第23回日本書道学術院展で特別奨励賞をいただき、副賞として、「文子白寿」の落款印をいただきました。

俳句には季語が入っていますね。季語とは何ですか。

季語とは俳句の中の季節を表す言葉です。季語を入れない俳句もありますが、私は、17文字（5・7・5）の有季定形を守って作っています。季語は美しい日本の言葉を凝縮したもので、自然の美しさや作者の思いを伝えるための大切な言葉です。歳時記にはたくさんの季語が集められています。例えば、秋は立秋（8月7日ごろ）から始まり、星月夜、花火線香、稲妻、法師蟬などの季語があります。

俳句では、悲しい、うれしいなどの直接的な言葉は使いません。ものや風景に例えて自分の気持ちを表現するので。それには、風の音や雨の匂い、草花の息吹など、自分の身近な自然に意識を向けることです。

たんぽぽの絮息つめて風選ぶ

これは、最近作った句です。たんぽぽの綿毛にも意志があり、好みの風が吹くまで息をつめてじっと待っている様子を詠んでいます。

高井さんが目標にしている人、尊敬している人などはいらっしゃいますか。

俳句を通して出会ったすべての人が師であり、尊敬できる人たちです。俳句には作者が歩んできた人生への思いが込められています。その思いをくみ取り、理解することが私の人生の糧となるからです。

卒寿よりはしたは言はず春惜しむ

これは卒寿（90歳）を過ぎて作った句で、人様から歳を聞かれたとき、白寿を迎える99歳まで、「卒寿を超えました」と答えてきました。



人生を楽しむ秘訣は何ですか。

私は子どもの頃から手当たり次第に本を読み、日本文学全集など、大抵の文学書を読みましたが、最近は2、3の俳誌を読むくらいです。映画は戦前、戦後の外国のものが好きです。今

も時々娘や孫に連れられて映画館に行きます。心が温まるような映画や、ときにはサスペンスも字幕入りの画面で楽しんでいます。

しかし、俳句作りは私にとって最大の楽しみです。俳句は命の存在を確かめさせてくれ、新しい勇気を与えてくれます。命あるものすべてがめぐり合わせだということを肝に銘じ、一日一日を大切に過ごしたいと思います。

白魚の微塵の目にも神の御意



高井さんの作品の数々